

西澤文隆の建築思想における《Ordinary》に関する研究

ロバート・ヴェンチューリとの比較を通して

Study on 《Ordinary》 in Architectural Theory of Fumitaka Nishizawa Through Comparison with Robert Venturi

○田中栄治（神戸女子大学）^{*1} 後藤沙羅（神戸大学大学院）^{*2}
増岡 亮（大阪工業大学）^{*3} 末包伸吾（神戸大学大学院）^{*4}

^{*1} Eiji TANAKA, Faculty of Home Economics, Kobe Women's University,
2-1 Aoyama, Higashisuma, Suma-ku, Kobe, 654-8585, e-tanaka@suma.kobe-wu.ac.jp

^{*2} Sara GOTO, Graduate School of Engineering, Kobe University,
1-1 Rokkodai, Nada-ku, Kobe, 657-8501, saragoto@people.kobe-u.ac.jp

^{*3} Ryo MASUOKA, Faculty of Robotics and Design, Osaka Institute of Technology,
1-45 Chayamachi, Kita-ku, Osaka, 530-8568, ryo.a.masuoka@oit.ac.jp

^{*4} Shingo SUEKANE, Graduate School of Engineering, Kobe University,
1-1 Rokkodai, Nada-ku, Kobe, 657-8501, suekane@people.kobe-u.ac.jp

キーワード: 西澤文隆, 建築思想, Ordinary, 言説

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

本稿は、建築家西澤文隆（1915-1986、図1）の建築思想の全体像について総体的かつ相対的に、その特質の析出を企図する研究の一環である。

西澤は、ル・コルビュジエのもとで建築を学んだ坂倉準三が1940年に創設した坂倉建築事務所の最初の所員となり、1969年の坂倉の没後は彼の意志を継承して坂倉建築研究所を率いた。この間、西澤は坂倉を通じてル・コルビュジエの近代建築の精神を学ぶ一方で、伝統的な日本建築や日本庭園の研究に取り組んだ。1948年に坂倉準三建築研究所大阪支所が開設されると、西澤は大阪支所長となり、この頃から京都の伝統的な日本建築や日本庭園を観察して歩き、1967年に建築と庭園のかかわりを究明すべく実測を開始した。西澤の設計活動は、戦前から戦後復興期、高度経済成長期を経てポストモダンの時代にまで及び、この間の日本の近現代建築思潮の流れのなかで自身の建築思想を貫き、建築設計のみならず、数多くの言説を通して自身の思想を社会に訴えた。西澤は、1967年に大阪府総合青少年



Fig.1 Fumitaka Nishizawa

野外活動センターにより日本建築学会賞、1985年に神宮前の家ほか一連の住宅により日本芸術院賞を受賞している。

本稿では、西澤の建築思想における《Ordinary》の概念に関して、西澤が参照したロバート・ヴェンチューリ（1925-2018）の「Ordinary」の概念を概観した上で、西澤の言説と比較・分析することにより、西澤がそれをどのように受容し、批判し、自身の建築思想の中でどう再構築したのかを明らかにし、さらに西澤が自邸（1979）の設計において《Ordinary》の概念をどのように実践しようとしたのかを明らかにすることを目的としている。

なお、西澤に関する主な既往研究や論考は、コート・ハウスを中心とした住宅の設計手法に関する研究、実測を中心とした日本庭園に関する研究、坂倉準三建築研究所の設計体制に関する研究がある。これまで、西澤の建築思想における《Ordinary》の概念に対するロバート・ヴェンチューリの影響や、設計における実践について明らかにした研究はいまだ行われていない。

1.2. 研究の方法

本稿は、筆者らによるこれまでの西澤の建築思想に関する研究のうち、西澤の【建築】に関する論考2編^{(1), (2)}に基づいて検討を行う。筆者らによるこれまでの西澤の建築思想に関する研究における調査の対象は、西澤の著書をはじめ、その他の書籍、雑誌、学会の機関誌、企業誌などに公表された西澤の論考のうち、現在検索および入手が可能な全資料409編である。これまでの研究では、これらの収集した論考のうち、西澤の建築思想に関連する記述がみられた263編の論考を対象とし、主題となる3,196の言説を析出した。さらにそれらの言説を構造化し、項目を抜き出

した上で、KJ 法に準じ、意味のまとまりに応じて分類・整理し、それぞれのまとまりを示す言葉を設定することにより、各言説の主題を表す項目を抽出した。なお、これまでの研究においては、抜粋した文章を、意味が変わらない程度に表現や単語をそのままあるいは一部の言葉を整理する作業を加えることを構造化とした。また、西澤の建築思想をより明確に概念として把握するために、原典からの引用および言説の構造化において、西澤の言説からできるだけ修飾や曖昧さを取り除き、可能な限り多くの言説を取り上げ、概念同士の関係、変遷について検討を行うことにより、西澤の建築思想の全体像の把握を目指している。さらに、これまでの研究で KJ 法を援用するにあたり、KJ 法における多くの断片的なデータをもとにグループ編成を行い図式化するという部分に準じた。各言説において、複数の概念の現れているものについては、その中から中心となる概念を抽出したのちに、抽出された概念に対して第 1～4 の水準を設定した。その過程において、ひとつの概念についての上位、下位概念の関係性の再検討、論考に立ち戻った上での文脈や文章の前後関係の把握を行った。このように反復して検討を繰り返し、各水準の項目を最終決定した。なお、言説の分類・整理に際しては、あらかじめ分類の項目を決めるのではなく、KJ 法に則して各言説の内容のあつまりから意味のまとまりをみつけ出していく方法を採用した。

その結果、抽出された項目のなかから、最も基幹的な概念として【建築】、【庭園】、【建築と庭園のかかわり】が析出され、これらを第 1 水準となる鍵語とした。次に、第 1 水準により分類した各項目について、意味のまとまりに応じて整理し、意味の階層性の視点から検討した結果、第 2～4 水準の鍵語に整理された。鍵語の設定にあたっては、言説と各水準の鍵語を 1 対 1 対応させることにより、複雑に構成された言説を、より明確に概念として把握し、それら概念同士の関係、変遷について検討を行うことを目指した。さらに、意味のまとまりの内容が鍵語自身で汲み取ることができるように設定した。また、西澤の言説を意味のまとまりに応じて分類し、意味の階層性の視点から検討・整理するなかで、異なった上位概念に対し類似する下位概念が配置されることがある。その点も含め、西澤の思想の多義性や複雑さについては、鍵語の各水準の包含関係に整理することを目指した。

これまで、建築家の思想を言説に即しながら検討する研究方法は数多く試みられており、特に建築家の言説をもとに思想や作品を分析した研究として、奥山らの一連の研究⁽³⁾⁽⁴⁾のほか、末包伸吾による建築家ルドルフ・シンドラールやリチャード・ノイトラの研究⁽⁵⁾などが存在し、本研究は末包のシンドラールの言説分析の方法に準じている。

本稿では、筆者らによるこれまでの西澤の建築思想に関する研究のうち【建築】の《Ordinary》の概念に関する言説を取り上げ、ヴェンチュリーらの「Ordinary」の概念との比較・分析を通して、西澤の《Ordinary》の概念の特質について検討を行う。その上で、西澤自邸の設計に関する言説を取り上げて分析し、西澤の《Ordinary》の概念の実践について検討する。西澤の【建築】の《Ordinary》に関する第 4 水準までの鍵語を表 1 に、【建築】の《Ordinary》に関する分析対象論考を表 2 に示す。

なお、西澤の建築思想については、これまでの研究と同

様に鍵語は第 1 水準を【】、第 2 水準を《》，第 3 水準を []，第 4 水準を 〈〉 で示し、原文そのままの文章や単語に「」を付し、構造化した言説に“”を付して言説番号として（論考発行年の西暦下 2 桁 - その年における論考番号 - その論考における言説番号）を数字で示す。また、西澤以外の原文そのままの文章や単語にも「」を付す。

Table.1 List of Keywords: 《Ordinary》 of 【Architecture】

※表中の()内の数字は、その鍵語に対応する言説の数を示す。

第 1 水準	第 2 水準	第 3 水準	第 4 水準
建築 (1594)	時代認識 (281)	(本稿では対象外)	
	空間 (296)	(本稿では対象外)	
	Ordinary (605)	目指す建築 (123)	生きた形 (13)
			混然のなかの調和 (30)
			創造における遊び (24)
			撞着からの飛翔 (56)
		住まい (124)	生活の器 (72)
			抵抗なく住める家 (23)
			変化への対応 (29)
		もの創り (162)	ものの本質 (38)
			情念の投影 (18)
			吸収と放射 (66)
	建築家の姿勢 (196)	エネルギーの傾注 (40)	
		素直な造形 (54)	
用の徹底 (46)			
体でつくる職人 (47)			
	組織による設計 (49)		
伝統を生かす (412)	(本稿では対象外)		

2. ヴェンチュリーらにおける「Ordinary」

この章では、ロバート・ヴェンチュリー (1925-2018) が、デニズ・スコット・ブラウン、ステイーブン・アイゼナワールとともに著した『ラスベガス』(1972, 1977, 邦訳 1978)⁽⁶⁾において「Ordinary」の概念をどのようにとらえており、さらに日本においてヴェンチュリーらの「Ordinary」の概念がどのように紹介されているのかを明らかにする。

2.1. 「過程」と「象徴性」における「Ordinary」

ヴェンチュリーらは、『ラスベガス』第 2 部のタイトルを「醜くて平凡な建築、または装飾された小屋」^{注1)}としており、翻訳者である石井らは、「Ordinary」を「平凡な」と訳している。『ラスベガス』においてヴェンチュリーらは、「空間、構造、プログラムからなる建築のシステムが、全体を覆っている象徴的形態によって隠し込まれ、歪められている場合」であり、「それ自身が象徴である特別な建物」を「あひる」(Duck) とし、「空間と構造のシステムがプログラム上の要請に無理なく従い、しかも、装飾がそれ自身他のものと無関係にとり付けられている場合」であり、「象徴で装飾された普通の建物」を「装飾された小屋」(Decorated Shed) としている。ヴェンチュリーらは、これら「二つのテーゼ」を「その両方とも正当」であるとし、「過程とか形態より以上に、イメージに重きを置きたい」と考えている^{注2)}。その上で、ヴェンチュリーらは、「実際には、ありきたりでどこにでもあるものののに、イメージは堂々としていて、独創的」である「含蓄の象徴主義の内容」を「堂々として独創的」とし、「イメージおよび実質においてありきたりのものであるばかりか、醜くて平凡」である「明白な象徴主義の内容」を「醜くて平凡な」としている^{注3)}。ヴェンチュリーらは、この論考で「建築における醜くて平凡な象徴主義」を論じ、「装飾された小屋の格別な重要性」を述べるとしている^{注4)}。

Table.2 List of Articles for Analysis : 《Ordinary》 of 【Architecture】

※表中の論考番号は、論考の発行年の西暦下2桁 - その年における論考番号を示す。
※表中の言説数は、【建築】の《Ordinary》に関する言説の数を示す。

論考番号	出版年月	論考タイトル	文献タイトル	出版社	ページ	言説数
59-1	1959-04	アンケート	建築と社会 1959年4月号	日本建築協会	44-45	4
60-1	1960-10	コルビュジェの変貌	建築と社会 1960年10月号	日本建築協会	46-51	1
61-1	1961-03	コルビュジェの空間	建築 1961年3月号	中外出版	111-114	1
61-3	1961-07	屋上の芝ふにつづく子ども室	子ども室と遊び場	主婦の友社	29	1
61-5	1961-07	1室に開放できるデラックスな姉弟のへや	子ども室と遊び場	主婦の友社	42-43	1
62-1	1962-09	小住宅のプラン200集	主婦の友シリーズ55	主婦の友社	95, 143, 149	2
62-2	1962-10	コートハウス論	新建築 1962年2月号	新建築社	89-95	1
63-1	1963-02	明日の住宅	新住宅 1963年2月号	新住宅社	71	2
63-4	1963-10	西の宮のM氏邸レポート	新建築 1963年10月号	新建築社	90-92	3
64-2	1964-03	倉敷国際ホテルに泊ってみて	新建築 1964年3月号	新建築社	115-116	1
65-3	1965-02	塩野義製菓の分室について	近代建築 1965年2月号	近代建築社	36	2
65-5	1965-02	塩野義製菓本社改造	近代建築 1965年2月号	近代建築社	80	1
65-6	1965-04	内部空間のしおり 建築家から 建築の内部空間	建築と社会 1965年4月号	日本建築協会	50-54	2
65-7	1965-07	分割か連結か	建築 1965年7月号	中外出版	24-25	2
65-8	1965-07	N氏邸	建築 1965年7月号	中外出版	41	1
65-9	1965-07	住まいというもの	新建築 1965年7月号	新建築社	157-159	14
66-1	1966-01	未来の都市住居	建築と社会 1966年1月号	日本建築協会	93-97	3
66-3	1966-08	コートハウス論	西澤文陸小論集1 コートハウス論	相模書房	56-84	2
67-1	1967-01	第12回工高生デザインコンクール入選作 総評	建築と社会 1967年1月号	日本建築協会	39	1
67-6	1967-07	Ky邸	建築文化 1967年7月号	彰国社	131-132	4
67-13	1967-11	ライブラリィ すまい(池辺陽著)	新建築 1967年11月号	新建築社	245	1
68-5	1968-04	庇のない木造建築/奥山ピラ	建築文化1968年4月号	彰国社	104	3
68-7	1968-05	交差した片流れ屋根/Sa氏邸	建築文化1968年5月号	彰国社	97	2
69-1	1969-01	平田氏と日本建築	教寄屋建築 平田雅哉作品集2	創元社	170-174	2
69-3	1969-01	カニと大阪/建築創作の人間性復活を	ひろば 1969年1月号	近畿建築士会協議会	66-71	3
69-7	1969-04	都市の景観など最近の感想から	ひろば 1969年4月号	近畿建築士会協議会	55-57	4
69-8	1969-04	小さな庭を楽しむ法	新住宅 1969年4月号	新住宅社	84-89	1
70-1	1970-01	波頭をとらえる1970 1970年への抱負	新建築 1970年1月号	新建築社	114	5
70-3	1970-05	建築とは何か?	ひろば 1970年5月号	近畿建築士会協議会	37	10
70-4	1970-06	坂倉先生と私の間-裏側から見た坂倉準三	建築 1970年6月号	中外出版	45-52	5
70-6	1970-08	特集 建築家の課題と責任 アンケート結果	建築と社会 1970年8月号	日本建築協会	41-42	4
70-7	1970-10	建築家のための造園基礎知識	ディテール 1970年10月号	彰国社	56-63	1
71-2	1971-01	住まいの本質	建築と社会 1971年1月号	日本建築協会	72	7
71-3	1971-01	座談会 住宅産業と建築家	建築家 1971年1月号	日本建築家協会	40-51	2
71-4	1971-02	独立住宅の設計はなお意味をもちうるか	建築文化 1971年2月号	彰国社	98-106	4
71-5	1971-04	都市住宅技術資料集成0 アンケート	都市住宅 1971年4月号	鹿島出版会	70-71	3
71-7	1971-06	対談 清水九兵衛	建築評論 1971年6月号	建築評論社	27-40	5
71-8	1971-06	関西建築家への私信	建築評論 1971年6月号	建築評論社	54-63	7
72-1	1972-03	インテリアデザイン分野における協力体制	建築と社会 1972年3月号	日本建築協会	48-49	6
72-2	1972-03	長い長い病気の長い長い報告	建築評論 1972年3月号	建築評論社	34-49	2
72-3	1972-08	職能ということ-建築界のあらしの中で	ひろば 1972年8月号	近畿建築士会協議会	36-37	4
72-4	1972-10	われわれは何处へ行くか	建築家 1972年10月号	日本建築家協会	37-38	4
72-5	1972-12	住まいにおいて地域性は存続するか	工芸ニュース 1972年12月号	丸善	3-5	6
73-1	1973-01	新建築住宅設計競技1973応募規定	新建築 1973年1月号	新建築社	159-162	7
73-3	1973-02	住宅における自然と伝統への対応	新建築 1973年2月号	新建築社	271-278	5
73-4	1973-03	緑との対話	都市住宅 1973年3月号	鹿島出版会	9-36	2
73-5	1973-05	緑・人・自然	都市住宅 1973年5月号	鹿島出版会	9-24	2
73-8	1973-07	人間社会における皮膚について	新建築 1973年7月号	新建築社	171-182	8
73-9	1973-07	門真再開発に思う	建築文化 1973年7月号	彰国社	101-102	2
73-10	1973-10	なにをよりどころにつくるか	建築家 1973年10月号	日本建築家協会	76-81	24
73-11	1973-10	わが事務所の実態と心意気	建築雑誌 1973年10月号	日本建築学会	1121-1122	4
73-12	1973-10	住宅のディテール 内外空間の接点	ディテール No. 38	彰国社	85-104	7
74-1	1974-02	てい談 明日の建築はどうなるか	建築と社会 1974年2月号	日本建築協会	21-28	3
74-2	1974-02	篠原さんへの質問	新建築 1974年2月号	新建築社	217-218	3
74-3	1974-04	息づくもの	ディテール No. 40	彰国社	90	3
74-4	1974-07	最高裁判所をみて 帝王の悲劇-受肉について	新建築 1974年7月号	新建築社	223	3
74-18	1974-10	八瀬の家所感	建築文化 1974年10月号	彰国社	118-119	1
74-19	1974-12	特集・桂離宮 格調	木 1974年12月号	篠田銘木店	5-6	1
75-2	1975-01	近代の呪縛に放て 序章 建築家など80人に“近代”を問う	建築文化 1975年1月号	彰国社	63	5
75-5	1975-02	日本における木造の形	商店建築 1975年2月号	商店建築社	157-161	4
75-6	1975-03	月評	新建築 1975年3月号	新建築社	261	3
75-10	1975-07	月評	新建築 1975年7月号	新建築社	275	2
75-11	1975-08	冷徹から明徹の現代感覚へ	インテリア No. 197	インテリア出版	64	3
75-12	1975-08	月評	新建築 1975年8月号	新建築社	275	1
75-20	1975-10	あとがき	西澤文陸小論集2 庭園論1	相模書房	421-427	1
75-22	1975-12	月評	新建築 1975年12月号	新建築社	253	1
76-1	1976-01	アンケート 建築デザインについての証言76	建築と社会 1976年1月号	日本建築協会	94	3
76-3	1976-04	ホテルのデザイン雑感	新建築 1976年4月号	新建築社	190-192	1
76-9	1976-09	建築と都市景観	建築雑誌 1976年9月号	日本建築学会	736	8
76-11	1976-10	無手勝流切断技法	宮協権対談集	新建築社	109-160	30
76-12	1976-11	数寄屋考-なだ万 山茶花荘の解説を兼ねて	新建築 1976年11月号	新建築社	169-172	6
76-13	1976-11	村野藤吾の和風 数寄の世界	木 1976年11月号	篠田銘木店	24-28	4
77-2	1977-01	Serial Essay-装飾(1)近代建築の周辺で	SD 1977年1月号	鹿島出版会	215-216	2
77-3	1977-01	何が所員教育か	建築家 1977年1月号	日本建築家協会	48-50	19
77-7	1977-03	書評 屈折せるディテールの集積の中で	新建築 1977年3月号	新建築社	265	1
77-10	1977-06	その歩んだ道と作品	建築とまちづくり1977年6月号	新建築家技術者集団	46-52	3
77-12	1977-07	こもらせる	ディテール No. 53	彰国社	58-59	1
77-13	1977-09	始源の世界-印度	SD 1977年9月号	鹿島出版会	81-82	1
77-14	1977-09	造る立場からの同時代観	建築雑誌 1977年9月号	日本建築学会	32-33	2
77-15	1977-10	思い出すまに	吉田好伸その人と作品	吉田好伸その人と作品出版委員会	4-7	3
77-16	1977-12	建築の美とは何か-近代建築の流れの中で	建築家 1977年12月号	日本建築家協会	9-15	9
78-1	1978-01	排除の歴史-近代建築思考考	建築と社会 1978年1月号	日本建築協会	57-63	19
78-4	1978-04	庭への履歴書	庭 1978年4月号	建築資料研究社	74-116	2

78-5	1978-04	私の視点 生きた形	日経アーキテクチュア 1978年4月3日号	日経BP	21	9
78-6	1978-05	悪条件を逆手にとって新しい形をつくろう	日経アーキテクチュア 1978年5月29日号	日経BP	16	9
78-11	1978-10	寝殿造りの家具	ディテール No. 58	彰国社	54	1
78-12	1978-11	「コート・ハウス」をはじめたころ	新建築 1978年11月 臨時増刊号	新建築社	242	2
79-11	1979-11	住宅のむつかしさ	建築雑誌 1979年11月号	日本建築学会	31-32	7
80-1	1980-01	住宅について堂々めぐりしながらくどくどと考えたこと	ひろば 1980年1月号	近畿建築士会協議会	35-38	36
80-3	1980-04	私の耐久性論 人間にとって耐久性とは	建築と社会 1980年4月号	日本建築協会	23	2
80-6	1980-06	出江さん考	新建築 1980年6月号	新建築社	164	2
80-11	1980-08	特集 住宅にみる 建築家と社会の構図	新建築 1980年8月号	新建築社	156	4
80-12	1980-09	はみ出しを徹底してみたら 宮脇さん 対談	日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀	新建築社	47-50	1
80-13	1980-10	模倣と創造	建築雑誌 1980年10月号	日本建築学会	62-64	18
80-16	1980-12	子孫に伝えるものを	建築とまちづくり 1980年12月号	新建築家技術者集団	15	1
81-2	1981-02	日本建築の特質	建築雑誌 1981年2月号	日本建築学会	36-43	2
81-3	1981-02	コンクリート住宅に透きの空間をつくる	新建築 1981年2月号	新建築社	191-196	6
81-4	1981-02	西沢邸ディテール	新建築 1981年2月号	新建築社	197-201	1
81-5	1981-02	なぜコート・ハウスでないのか	建築文化 1981年2月号	彰国社	40-41	2
81-7	1981-02	防衛を固め綿密な計画で	日経アーキテクチュア 1981年2月2日号	日経BP社	104-105	3
81-8	1981-03	建築-私との出会い 15	建築文化 1981年3月号	彰国社	21	2
81-13	1981-06	3 日本の合理性	建築NOTE 西澤文隆 伝統の合理主義	丸善	108-201	5
81-18	1981-06	素材に対する強い執着から生まれた爽やかな形態の抽象性	SD 1981年6月号	鹿島出版会	151-158	12
82-1	1982-01	波頭をとらえる1982 地道な努力こそ	新建築 1982年1月号	新建築社	102	3
82-2	1982-01	数寄屋論-堀口捨巳・村野藤吾・吉田五十八の建築と庭園をみて	SD 1982年1月号	鹿島出版会	156-163	2
82-4	1982-01	私にとって<自邸>とは 宿泊所・仕事場・遊び場	都市住宅 1982年1月号	鹿島出版会	138-140	4
82-6	1982-02	自然との共存はむずかしい	建築知識別冊第9集 <緑>と空間演出	建知出版	141-142	1
82-7	1982-02	私にとっての伝兵衛さん	和風建築 1982年2月号	建築資料研究社	28	1
82-9	1982-03	わがASSOCIATESの目指すもの	建築画報 1982年3月号	建築画報社	48	10
82-10	1982-03	私の視点 Ordinaryに、心をこめて	日経アーキテクチュア 1982年3月29日号	日経BP	27	6
82-15	1982-06	近代建築の行方	新建築学体系 1 建築概論	彰国社	95-108	14
82-16	1982-07	近代数寄屋 建築家の証言2 危険な綱渡りの快感	建築雑誌 1982年7月号	日本建築学会	24-27	3
82-20	1982-09	ホテルバシフィック東京	建築技術を語る2	新建築社	39-74	1
82-21	1982-09	建築と都市環境 建築の形・色彩・材料と都市環境	ひろば 1982年9月号	近畿建築士会協議会	33-45	7
83-12	1983-05	近代建築はこれからだ	新建築 1983年5月号	新建築社	148-150	7
83-16	1983-07	変貌するインテリアデザインの領域	新建築 1983年7月 臨時増刊号	新建築社	71-78	1
83-28	1983-12	特集 空間の質 1 テクスチャアー 1 屋根	ina REPORT No. 49	伊奈製陶株式会社	3-11	1
83-29	1983-12	INA FORUM 建築を語る・西澤文隆／林昌二	ina REPORT No. 49	伊奈製陶株式会社	12-15	1
84-1	1984-01	ものをつくるということ	建築文化 1984年1月号	彰国社	91	6
84-4	1984-02	住宅設計のための 住宅入門	新住宅 1984年2月号	新住宅社	85-88	17
84-10	1984-03	私の建築印象 錦帯橋	新建築 1984年3月号	新建築	176-177	2
84-14	1984-04	建築家が自邸をつくるとき	家家	学芸出版社	57-134	11
84-19	1984-05	アプローチの空間と造型	日本庭園集成 玄関の庭	小学館	185-193	1
84-24	1984-07	アンケートに見る 建築の近未来	新建築 1984年7月号	新建築社	146	3
84-27	1984-08	特集 空間の質 5 室の内・外	ina REPORT No. 53	伊奈製陶株式会社	3-11	1
84-37	1984-11	和風ということ	和風建築の施工と詳細 書院と茶室・鴻臚館	建築資料研究社 住宅建築別冊16	4-5	2
85-6	1985-04	「加須青年の家」寸評	建築文化 1985年4月号	彰国社	100	2
85-8	1985-06	実測で知る恍惚の境地	日経アーキテクチュア 1985年6月3日号	日経BP	23	1
85-17	1985-10	建築家の世界	ひろば 1985年10月号	近畿建築士会協議会	11-16	7
85-19	1985-11	平田雅哉の数寄屋	数寄屋建築詳細図集 -平田雅哉から平田建設へ-	建築資料研究社 住宅建築別冊21	4-5	3
85-21	1985-12	最近の住宅の在り方	新住宅 1985年12月号	新住宅社	74-75	8
85-23	1985-12	日本の住居1985 戦後40年の軌跡とこれからの視座	建築文化 1985年12月号	彰国社	60	1
86-3	1986-02	大住邸 ビル屋上のハンギングガーデン	建築文化 1986年2月号	彰国社	58-59	4

ヴェンチャーリらは、自分たちの設計したギルド・ハウス（1963）を例に挙げ、「醜くて平凡な」象徴主義であり、その「平凡さの象徴主義はさらに一步進んでいる」とし^{注5)}、ギルド・ハウスが「すべてに平凡」であるからといって「つまらない」とは言えないと考えている^{注6)}。一方で、ヴェンチャーリらは、近代建築が折衷主義を放棄した時に象徴主義も消去してしまったとし、近代建築は空間、構造、平面上の純粋な建築的要素を執拗に分節化することにより表現が空虚でつまらなく、無責任でさえある無味乾燥な表現主義となり、「近代建築は自らあひるとなってしまった」と批判している^{注7)}。その後ヴェンチャーリらは、歴史上の象徴主義やラスベガスのストリップ、都市スプロールにおける象徴主義などを事例とし、さらに自分たちの経歴について述べることを通して、建築は「いかに建設されるか」という「過程」と、「いかに見られるか」という「象徴性」のふたつの意味において「平凡」もしくは「通常」であった方が良くと結論づけている^{注8)}。ヴェンチャーリらは、「醜くて平凡な」建築は、単に「平凡」であるばかりでなく、象徴的様式的意味合いでの「平凡さ」を表現しているとして、幾重もの文学的意味をもたらすがゆえに豊穡であり^{注9)}、彫塑的な「あひる」の「堂々たる象徴性」より「装飾された小屋」の「平凡な象徴性」を支持するとしている^{注10)}。

2.2. 磯崎新による日本での紹介

ヴェンチャーリらの『ラスベガス』は1978年に邦訳されているが、それより以前に、その一部は『美術手帖』1971年2月号に掲載された磯崎新の「建築の解体・6 ロバート・ヴェンチャーリ 現代マニエリスムとしての混成品建築」⁽⁸⁾によって日本に紹介されている。ここでは、磯崎は「Ordinary」を「普通の」と訳している。磯崎は、ヴェンチャーリらが「普通の建築」を方法の主題に据えるということは、歴史のなかの多様な様式の諸要素、現代美術の雑多なパターン、都市的に土着した性格、エレクトロニクス、ポップ、宇宙テクノロジー、初期機械時代に固有な表現、これらが等価になって醜悪に存在している現代と建築がはじめてからみ合う契機を見出すと考えている^{注11)}。磯崎は、「複合して錯綜する環境への肯定的な認識」があり、「混成品や複合媒体と呼ばれる手法」がクローズアップされると、「マニエリスム的な世界」がひらけてくるとし、ヴェンチャーリらの「Ordinary」を「マニエリスム的」と考えている^{注12)}。

さらに、磯崎は1975年に出版された『建築の解体』⁽⁹⁾において、『美術手帖』1971年2月号の記事を一部加筆・修正して再録している。ここで磯崎は、ヴェンチャーリらの建築デザインの方法を「つねにアイロニカルな表現を意図し

ているという点で一貫している」とし、作品をデザインすることがヴェンチャーリらにとっては「ひとつの批評的行為となっている」としている。磯崎は、ヴェンチャーリらが「みずから『醜悪と陳腐』の建築と呼んでいるように、近代建築の正統である純粋な抽象的形態や簡明な新素材の追求とは異なって、土着的・歴史的・通俗的要素などが必要に応じて内包されていく」としている^{注13)}。その上で、磯崎はイェール大学数学教室棟を事例に取り上げ、ヴェンチャーリらの設計において、旧館のなかにあるレトリックによる新旧両方を関係づける「イメージ」における「普通」と、経済的な建設と維持のための「実質」における「普通」を紹介している^{注14)}。

2.3. まとめ

ヴェンチャーリらの「Ordinary」は、いかに建設されるかという「過程」における「Ordinary」と、いかに見られるかという「象徴性」における「Ordinary」のふたつの意味で用いられており、ヴェンチャーリらはそれら両方の意味において「Ordinary」であることは良いと考えている。ヴェンチャーリらは、近代建築は純粋な建築的要素を執拗に分節化することにより表現が空虚でつまらなく、無味乾燥な表現主義となってしまったと批判した上で、「過程とか形態より以上に、イメージに重きを置きたい」とし、「過程」における「Ordinary」よりも「象徴性」における「Ordinary」に重きを置きたいとしている。ヴェンチャーリらは「Ordinary」の建築は単に「Ordinary」であるばかりでなく、「Ordinary」の象徴主義であり、象徴の様式的意味合いでの「Ordinary」を表現しているとして、すべてに「Ordinary」であるからといって「つまらない」とは言えないとしている。これに対し、磯崎はヴェンチャーリらの「Ordinary」の建築は、近代建築の正統である純粋な抽象的形態や簡明な新素材の追求とは異なって、土着的・歴史的・通俗的要素などが必要に応じて内包されていくとし、全体を統括する簡明なシステムがつねに細部において攪乱され、諸要素が痕跡的に組みこまれて、「マニエリスムの」な世界がひらけてくると考えている。

3. 西澤文隆の建築思想における《Ordinary》

この章では、西澤の建築思想における【建築】の《Ordinary》の概念の特質について、ヴェンチャーリらの「Ordinary」の概念との比較・分析を通して検討を行う。

3.1. 【目指す建築】

西澤は、“建築は用だけで形が定まるわけがない。建築とは生きた形を創る創造行為である（78-5-2）”とし、“混然の中に錯乱することなく静かな調和ある空間を造り出す（73-10-38）”として、【建築】とは〈生きた形〉をつくる「創造行為」であり、現代の【建築】に〈混然のなかの調和〉を求めている。西澤は、“R. ヴェンチャーリーの言葉の通り、包摂、複合、混成の中でこそ命のあるものをつくれる。統一でなく混沌でよい（78-1-11）”とし、『建築の多様性と対立性』（1966, 1977, 邦訳1982）⁽⁷⁾におけるヴェンチャーリーの言葉を参照し、「統一」でなく「混沌」でよいとし、〈混然のなかの調和〉により「命のあるもの」がつかれるとしている。

西澤は“創造には遊びの精神が必要である。遊びとは、ゆとりがあって動ける状態である（80-1-41）”とし、

“16世紀の建築家は、旧套墨守で退屈でつまらなく

（ordinary）見えて、ぎょっとするようなひらめきが見える（77-16-34）”として、【建築】には〈創造における遊び〉が必要であるとし、マニエリスムの建築家による「ひらめき」を評価している。一方で、西澤は“ヴェンチャーリのordinaryは英雄的発想に対する反語にすぎない。奇想がひらめいていなければordinaryではない（77-16-36）”として、ヴェンチャーリらの「Ordinary」を近代建築家による「英雄的発想に対する反語にすぎない」と批判し、【建築】が《Ordinary》であるためには〈創造における遊び〉による「奇想」がなければならないとしている。

さらに、西澤は“創造行為は撞着する目的や使い勝手を満足させ、物に則して創造への飛翔により現時点で生み出すもの（78-5-3）”とし、“用途も材料も知りつくした状態では、全く自由に飛翔出来た。物と作者が合一してこそ可能で、真のOrdinaryと呼ぶ（78-5-11）”として、〈撞着からの飛翔〉により現代の【建築】が創造できるとし、【建築】の用途も材料も知りつくし、【建築】と建築家が合一してこそ、全く自由に〈撞着からの飛翔〉が可能であり、それを真の《Ordinary》と考えている。

3.2. 【住まい】

西澤は、“住まいは人間の生活の容器である。人間の生活内容が変貌しつつある。CIAM時代には人間の生活を社会活動と個人生活に截然と二分できた（71-2-1）”とし、[住まい]は人間の〈生活の器〉であるとして、CIAMの時代に比べて「人間の生活内容が変貌しつつある」としている。その上で、西澤は“アメリカの若いポスト・モダニストたちの作品は、住まい手の自由な住まい方の人間らしさまでにじみ出ているようで快い（85-21-21）”としてヴェンチャーリら以降のアメリカの若いポスト・モダニストたちの設計した[住まい]を、「人間らしさまでにじみ出ている」として評価している。西澤は、“誰でもが改変せずに抵抗なく快適に住めるような家こそ住まいの原型と云える（80-1-26）”とし、“その人に向く空間をつくり、変えられる家が望ましく、ある程度スペースが必要である（71-4-7）”として、誰でもが〈抵抗なく住める家〉であり、住まい手の〈変化への対応〉ができる[住まい]が《Ordinary》で望ましいと考えている。

3.3. 【もの創り】

西澤は、“混沌とした状況下で物の本質をつかんでいなければ真の創造はない。創造における水平思考である（73-12-14）”とし、“使い方が体でわかり、使う物の本質を徹底的に把んでこそ出来る。それこそordinaryの名に値しよう（85-21-20）”として、【建築】の[もの創り]には「混沌」とした状況下で〈ものの本質〉を徹底的につかんでいなければ「真の創造」はないとし、〈ものの本質〉をつかんでこそ《Ordinary》の名に値するとしている。さらに、西澤は“昔の人々のように芯から理解していれば、普通に平凡に事に処し、自在に飛翔し得る。Ordinaryと呼ぶ（82-15-72）”として、昔の人々のように〈ものの本質〉を理解し、「普通に平凡に事に処し」、「自在に飛翔し得る」ことを《Ordinary》と呼んでいる。

その上で、西澤は“創り出す行為とは作品に己れの情念をすべり込ませる行為である（80-13-14）”とし、“自然に創る人の感覚や情念が実を結ばなければならない。これを

ordinary と呼ぶ (78-1-25)”として、建築家の〈情念の投影〉が自然に実を結ぶことを《Ordinary》と考えている。西澤は、“物をつくるということの実態は体で受け止め、体からにじみ出さすところにある (82-15-39)”として、[もの創り]には「蓄積」の〈吸収と放射〉が必要であるとしている。西澤は、日本の伝統的な【建築】と【庭園】の実測を通して“何の変哲もないordinaryな建物だが、あらゆる厳しい制約の中で、デザインエネルギーが迸り出ている (85-21-15)”とし、“建築家は、自己のエネルギーをどれだけ傾注して空間をつくるかが勝負である (84-1-1)”として、日本の伝統的な【建築】は《Ordinary》でありながら、「デザインエネルギー」がほとばしり出ているとし、建築家は【建築】をつくる時のおのれの〈エネルギーの傾注〉こそ勝負であるとしている。

3.4. [建築家の姿勢]

西澤は、“撞着する諸要素を、用と材を深く極め、機微をつかみ素直に形にまで高める (78-5-4)”とし、“Ordinaryは素直で、即物的で合目的に徹した姿をこそ指すべきではないか (78-5-7)”および“普通 (ordinary) で素直にあるがままにつくり出してこそ、本当の形が生まれ出る (82-15-58)”として、〈素直な造形〉で、即物的な〈用の徹底〉こそ《Ordinary》であり、「本当の形が生まれ出る」としている。

西澤は“古来建築を実測し続けているものはOrdinaryにつくるべきだと痛い程に感じる (78-5-9)”とし、“普通 (ordinary) で平凡に見えても、謙虚に先人の跡を学び真摯な努力を続けるより手はない (82-15-68)”として、日本の伝統的な【建築】や【庭園】の実測を通して、現代の【建築】は《Ordinary》につくるべきだとし、伝統に学び、《伝統を生かす》「真摯な努力」を続けるより手はないとしている。西澤は、“私も建築家でありたいとは思いますが、その上に職人でありたい (76-11-65)”とし、

“Ordinaryは、普通のつまらない、しかも内から匂い出る造形意欲が光っている。そのような Ordinaryな形をつかっていきたい (78-5-8)”として、建築家である上に【建築】を〈体でつくる職人〉でありたいとし、「普通」の「つまらない」ものでありながら、「匂い出る造形意欲」が光る《Ordinary》な【建築】をつくりたいとしている。

3.5. まとめ

西澤は、ヴェンチュエリの著書を参照し、「統一」でなく「混沌」でよいとして、〈混然のなかの調和〉により「命のあるもの」がつくれるとしている。さらに、西澤はヴェンチュエリと同様に、マニエリスムの建築家による「ひらめき」を評価し、さらにヴェンチュエリら以降のアメリカの若いポスト・モダニストたちの設計した「住まい」を、「人間らしさまでにじみ出ている」として評価している。一方で、西澤はヴェンチュエリらの「Ordinary」を近代建築家による「英雄的発想に対する反語にすぎない」と批判している。ここでは、西澤はヴェンチュエリらの「過程」における「Ordinary」は肯定的にとらえ、ヴェンチュエリらが重きを置いている「象徴性」における「Ordinary」は批判しているのとらえることができる。

その上で、西澤は〈ものの本質〉をつかみ、【建築】の用途も材料も知りつくし、【建築】と建築家が合一した〈素直な造形〉で、即物的な〈用の徹底〉こそ、全く自由

に〈撞着からの飛翔〉が可能であり、そこに奇想がひらめいていることを真の《Ordinary》と考えている。西澤は、建築家の〈情念の投影〉が自然に実を結ぶことを

《Ordinary》とし、「普通」の「つまらない」ものでありながら、「匂い出る造形意欲」が光る《Ordinary》な【建築】をつくりたいと考えている。さらに、日本の伝統的な【建築】は《Ordinary》でありながら、「デザインエネルギー」がほとばしり出ているとし、昔の人々のように〈ものの本質〉を理解し、「普通に平凡に事に処し」、「自在に飛翔し得る」ことを《Ordinary》と呼び、実測を通して現代の【建築】は《Ordinary》につくるべきだとして、伝統に学び、《伝統を生かす》「真摯な努力」を続けるより手はないと考えている。西澤は、【建築】とは〈生きた形〉をつくる「創造行為」であるとし、〈ものの本質〉をつかんだ「真の創造」を求めていることから、これらはいかにつくるかという「創造」における《Ordinary》であるといえる。西澤は、ヴェンチュエリらの「象徴性」における「Ordinary」を批判し、「過程」における「Ordinary」を肯定的にとらえ、その上で「創造」における《Ordinary》を目指していると考えられる。

4. 西澤自邸の設計における《Ordinary》

この章では、西澤の自邸 (1979, 図2, 3) を事例として、西澤の建築思想における《Ordinary》の概念を、自身の設計においてどのように実践しようとしたのかを考察する。

西澤は、“近頃のように人を驚かすことに身をやつす建築家を見ると、せめて自分の家は ordinary にやって見せたい (82-10-2)”とし、“誰も驚かすことなく、内に居て気持ちよく過ごせれば ordinary であることは最高ではある

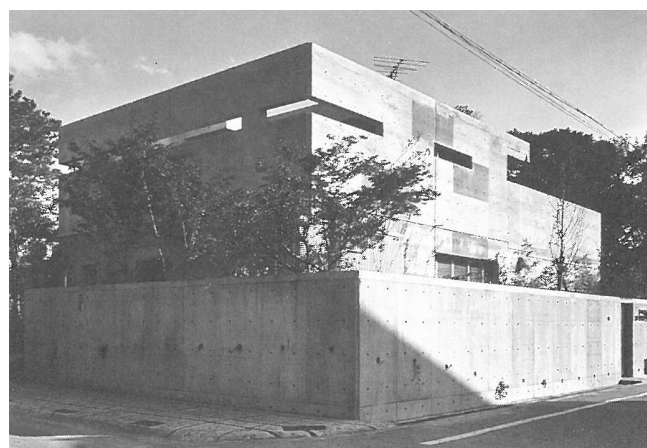


Fig.2 Exterior of Fumitaka Nishizawa's Residence

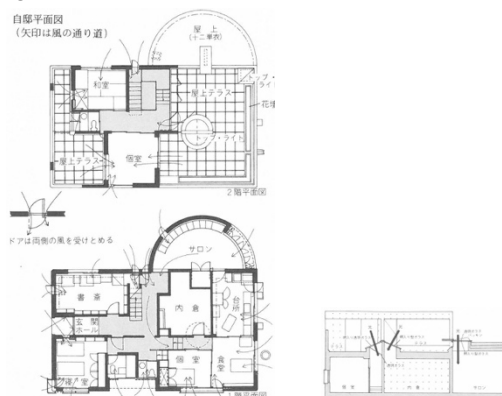


Fig.3 Plan and Section of Fumitaka Nishizawa's Residence

(82-10-3)”として、自邸の設計において《Ordinary》であることを目指している。さらに、西澤は“普通のことを普通にやってのけてordinaryでありながら、感性にひしひしと訴えかけてくる作品が出来ないものか(85-21-13)”として、そこには「普通のことを普通にやってのけ」る「過程」における「Ordinary」と、「感性にひしひしと訴えかけてくる」「創造」における《Ordinary》の視点をみることができる。ここでは、西澤の共著『家家』⁽¹⁰⁾(1984)に収録されており、西澤が自邸について詳しく記している論考番号84-14「建築家が自邸をつくるとき」の言説を対象とし、「過程」における「Ordinary」と「創造」における《Ordinary》の視点から検討を行う。

4.1. 「過程」における「Ordinary」

西澤は、自邸の設計にあたって“日本の伝統的空間とはほど遠いものの中で、伝統的感性をいかに盛り込むかが腕の振いどころである(84-14-9)”としており、自邸のなかでも「日本の伝統的空間とはほど遠いもの」は「過程」における「Ordinary」であり、「伝統的感性をいかに盛り込むか」は「創造」における《Ordinary》を目指したものであると考えられる。

西澤は、“住宅の根源は自然から身を守ることに端を発し、今も変わることがない(84-14-11)”とし、“人口の都市集中により、プライバシーを保って安穩に暮らすために防禦型になる(84-14-15)”および“自然は旺盛に生きさせ、庭園化しないで住んでいくためには防禦型が向いている(84-14-17)”として、家族構成や日常生活、防犯、周辺環境の面から、自邸はそれまで西澤が主張してきた日本の伝統である開放的な「住まい」ではなく「防禦型」にならざるをえないとしている。さらに、西澤は“窓を小さく少なくした理由は省エネ省資源問題である。宇宙船地球号に住む建築家の義務である(84-14-12)”および“建物の表面積が小さく、凸凹の少ない方が省エネも経済性も得である(84-14-13)”とし、“あからさまに表現しようなどとはせず、もっぱら用に従って形をつくり出していった(84-14-22)”として、〈用の徹底〉により「過程」における「Ordinary」の実践を目指している。西澤は、“中廊下に必要な部屋がぶら下がる何もしない意図は達した。果たして建築になるかが腕の見せどころである(84-14-32)”とし、「過程」における「Ordinary」の意図は達したとし、その上で「創造」における《Ordinary》の実践が腕のみせどころと考えている。

4.2. 「創造」における《Ordinary》

先にみたように、西澤は自邸に伝統的感性を盛り込むことにより「創造」における《Ordinary》を目指した。西澤は、“日本で建築するからには伝統空間を生かすのが素直であると私は主張し、設計でも守ってきた(84-14-4)”とし、自邸が「防禦型」になることに対して、“茶室という一つの範例はある。ディテールの点でも、空間構成の上でも、囲われた中でいかに透かせるか(84-14-10)”とし、“庇を取って柔らかな光を家に満たし、雨も防いで窓を開けておくことが可能か(84-14-14)”として、これらは「創造」における《Ordinary》の課題であると考えている。

西澤は、“天井と床を何度も反射しながら一室空間を浸していく光は日本の民家のよさである(84-14-2)”とし、“昼は自然光だけで明るい中廊下をつくる意図から、トップライトを使わざるを得ない(84-14-33)”として、“光に

ついては予想以上の出来で、全体を柔らかな光が包み込み、誠によい具合(84-14-34)”であるとしている。さらに、西澤は“防禦型をとりながら、日本の風土にも合った風通しのよい家がどこまで可能か(84-14-18)”とし、“日本の住まいは風が吹き通るのが一番。どこから吹いても捉えて家中を吹き廻るように心掛けて設計し、成功したようだ(84-14-35)”としている。西澤は、「防禦型」の囲われたなかで、茶室という「日本の伝統空間を生かし」、「柔らかな光」と「風通しのよい」[住まい]とすることを目指している。さらに、西澤は“材質的にも比例的にもよく統禦されつくし、互いに響き合い空間をうたいあげていなければならない(84-14-36)”とし、“単純さこそ、伝統精神の中で、最も継承したい(84-14-38)”として、現代の【建築】に日本の《伝統を生かす》ことにより「創造」における《Ordinary》の実践を目指している。

4.3. まとめ

西澤は、自邸の設計にあたって、家族構成や日常生活、防犯、周辺環境の面から、それまで西澤が主張してきた日本の伝統である開放的な「住まい」ではなく、「防禦型」にならざるをえないとしている。その上で、西澤は省エネと経済性の面から建物の表面積を小さくするために凸凹を少なくし、さらに窓を小さく少なくしたとし、あからさまな表現はせず、〈用の徹底〉により「形をつくり出していった」としている。西澤は、中廊下に必要な部屋がぶら下がる何もしない意図は達したとして、「過程」における「Ordinary」の意図は達したとし、その上で「創造」における《Ordinary》の実践が腕のみせどころであると考えている。

西澤は、自邸に伝統的感性を盛り込むことにより「創造」における《Ordinary》を目指している。西澤は、自邸が「防禦型」にならざるをえないのに対して、「茶室という一つの範例はある」とし、茶室という日本の伝統空間を生かし、囲われたなかで「柔らかな光」と「風通しのよい」[住まい]とすることを目指している。その上で、西澤は材質的にも比例的にも統禦され、「互いに響き合い空間をうたいあげていなければならない」とし、「単純さこそ、伝統精神の中で、最も継承したい」として、現代の【建築】に日本の《伝統を生かす》ことにより「創造」における《Ordinary》の実践を目指している。

5. 結言

本稿では、西澤が参照したヴェンチュリーらの「Ordinary」の概念と比較・分析し、さらに西澤自邸の設計における《Ordinary》の概念の実践について検討することにより、西澤の建築思想における《Ordinary》の概念の特質について明らかにしようとしてきた。

ヴェンチュリーらの「Ordinary」は、いかに建設されるかという「過程」における「Ordinary」と、いかに見られるかという「象徴性」における「Ordinary」のふたつの意味で用いられており、ヴェンチュリーらは両方の意味において「Ordinary」であることは良いと考えている。ヴェンチュリーらは、近代建築は無味乾燥な表現主義となっていると批判した上で、「過程」における「Ordinary」よりも「象徴性」における「Ordinary」に重きを置きたいとしている。ヴェンチュリーらは、「Ordinary」の建築は単に

「Ordinary」であるだけでなく、「Ordinary」の象徴主義であり、象徴的様式的意味合いでの「Ordinary」を表現しているとしている。一方で磯崎は、ヴェンチュリーらの「Ordinary」の建築を「マネエリスムの」としている。

これに対し、西澤はヴェンチュリーを参照して「統一」でなく「混沌」でよいとし、ヴェンチュリーら以降のアメリカの若いポスト・モダニストたちの設計した「住まい」を評価する一方で、ヴェンチュリーらの「Ordinary」を近代建築家による「英雄的発想に対する反語にすぎない」と批判している。その上で、西澤は「ものの本質」をつかんだ「素直な造形」で、即物的な「用の徹底」こそ「撞着からの飛翔」が可能であり、そこに奇想がひらめいていることを真の《Ordinary》としている。西澤は、建築家の「情念の投影」が自然に実を結ぶことを《Ordinary》とし、「普通」の「つまらない」ものでありながら、「匂い出る造形意欲」が光る《Ordinary》な【建築】をつくりたいと考えている。西澤は、日本の伝統的な【建築】は

《Ordinary》でありながら、「デザインエネルギー」がほとばしり出ているとし、昔の人々のように「ものの本質」を理解し、「普通に平凡に事に処し」、「自在に飛翔し得る」ことを《Ordinary》と呼び、実測を通して現代の【建築】は《Ordinary》につくるべきだとして、伝統に学び、「伝統を生かす」「真摯な努力」を続けるより手はないとしている。西澤は、【建築】とは「生きた形」をつくる「創造行為」であるとし、「ものの本質」をつかんだ「真の創造」を求めていることから、これらはいかにつくるかという「創造」における《Ordinary》であるといえる。これらのことにより、西澤は、ヴェンチュリーらが重きを置く「象徴性」における「Ordinary」を批判し、「過程」における「Ordinary」を肯定的にとらえ、その上で「創造」における《Ordinary》を目指していると考えられる。

さらに、西澤は自邸の設計にあたって、家族構成や日常生活、防犯、周辺環境の面から「防禦型」にならざるをえないとし、省エネと経済性の面から建物の凸凹を少なくし、窓を小さく少なくしたとして、「用の徹底」により「形をつくり出していった」としている。西澤は、中廊下に必要な部屋がぶら下がる何もしない意図は達したとして、「過程」における「Ordinary」の意図は達したと考えている。その上で、西澤は自邸において茶室という日本の伝統空間を生かし、囲われたなかで「柔らかな光」と「風通しのよい」「住まい」とすることを目指している。西澤は、材質的にも比例的にも統禦され、「互いに響き合い空間をうたいあげていなければならない」とし、「単純さこそ、伝統精神の中で、最も継承したい」として、現代の【建築】に日本の《伝統を生かす》ことにより「創造」における《Ordinary》の実践を目指していることが明らかとなった。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP22K12693 の助成を受けたものである。

- 注1) 文献(6) p.117
注2) 同上 p.119
注3) 同上 p.131-132
注4) 同上 p.122
注5) 同上 p.132

- 注6) 同上 p.135-137
注7) 同上 p.137-138
注8) 同上 p.167
注9) 同上 p.169
注10) 同上 p.171-172
注11) 文献(8) p.126
注12) 同上 p.129
注13) 文献(9) p.214
注14) 同上 p.218

出 典

Fig.1 西澤文隆・金澤良春：西澤文隆のディテール 自然と共棲する術，彰国社，1987年12月10日，p.5

Fig.2 同上，p.10

Fig.3 文献(10)，p.74 および p.81

文 献

- (1) 田中栄治，末包伸吾，増岡亮，後藤沙羅：西澤文隆の言説にみる【建築】の《時代認識》，《空間》に関する思想，日本建築学会計画系論文集，89 巻，826 号，pp.2509-2520，2024 年 12 月
(DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.89.2509>)
- (2) 田中栄治，後藤沙羅，増岡亮，末包伸吾：西澤文隆の言説にみる【建築】の《Ordinary》，《伝統を生かす》に関する思想，日本建築学会計画系論文集，90 巻，831 号，pp.1112-1123，2025 年 5 月
(DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.90.1112>)
- (3) 奥山信一，山田深，坂本一成：建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル：建築家の創作論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，59 巻，456 号，pp.123-134，1994 年 2 月
(DOI: https://doi.org/10.3130/aija.59.123_1)
- (4) 奥山信一，坂本一成：戦後「新建築」誌における建築家の創作論：建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル，日本建築学会計画系論文集，60 巻，477 号，pp.101-108，1995 年 11 月
(DOI: https://doi.org/10.3130/aija.60.101_4)
- (5) 末包伸吾：主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷，日本建築学会計画系論文集，73 巻，627 号，pp.1155-1164，2008 年 5 月
(DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.73.1155>)
- (6) ロバート・ヴェンチュリー，デニス・スコット・ブラウン，ステイブン・アイゼナウアー共著，石井和紘，伊藤公文共訳：ラスベガス，SD 選書 143，鹿島出版会，1978 年 9 月 30 日
- (7) ロバート・ヴェンチュリー著，伊藤公文訳：建築の多様性と対立性，SD 選書 174，鹿島出版会，1982 年 11 月 30 日
- (8) 磯崎新：建築の解体・6 ロバート・ヴェンチュリー 現代マネエリスムとしての混成品建築，美術手帖，1971 年 2 月号，pp.110-129，美術出版社
- (9) 磯崎新：建築の解体，美術出版社，1975 年 4 月 15 日
- (10) 石井修，西澤文隆，出江寛，水谷颯介：家，学芸出版社，1984 年 4 月 20 日